さくらタイムス令和５年３月号

毎年度末には、１年間を振り返り反省し、より良く仕事を務めるにはどうすればよいかを絞り出してから、結果を出すと「覚悟を決め」ます。これを教えてくれたのは祖母（大園長の母）でした。祖父と船会社を起業し、順調に発展していた矢先に20代で５歳の大園長と乳飲み子の弟を抱えて未亡人となり、親族の勧める再婚話は断り、遺された貨物船なども戦争で軍に徴用された後は、ひたすら働き続けました。さくらの創成期「赤ちゃんホーム」時代には、徳島から船に４時間揺られ、大風呂敷にお土産をいっぱい持ってよく来てくれ、赤ちゃん達のお世話や家事の合間にも着物を仕立て編み物をし、止まっている姿が記憶にないほど動き回りながらも、「歌手になりたかった」といつも楽しそうに歌っていました。所持金が「片道の切符代」ほどになると「帰る」と荷物をまとめ、ポートタワーの港で先回りした母から切符を渡されると、残ったお金を全部兄と私に渡し、文字通りすっからかんで「また来るけん」と乗船していました。別れ際のさっぱりとまた一つやり切ったという笑顔は今も心にあります。私が落ち込んでいる時には「覚悟さえ決められればなんでも大丈夫。あとは歯んぎり噛んで（歯を食いしばって）がんばるだけよ」と両手を握りしめた頑張るポーズで教えてくれました。さくらが法人化するめどがたち、父親の顔すら覚えていない叔父が同じ船会社を起業し、広い隠居部屋がある家を建て始めた頃、祖母は体調を崩し入院させられました。そこでもじっとして

いられず、「特別室の患者さんがどうして大部屋のお世話をしてゴミ箱まで洗うの！」と婦長さんに叱られていました。見舞いの母が「もうすぐきれいな家ができるよ」と言うと「新築から葬式を出すのはだめ」と応え、完成直前、まるで祖父に寄り添うかのように命日の 3 日前に静かに旅立ちました。大正生まれの祖母は、その時代に一生懸命生きて今の社会の土台となった沢山の人々の一人でしたが、何をしてもあまりにも「明るく、潔く、パワフル」で、何につけてもあまりにも拙い私からは決して届きそうにないまぶしい目標です。それでも教えられた通り「覚悟さえ決めれば」と信じて、また一年を終え、次に向かってゆこうと思います。

れんげさん、3 年間さくらを明るく楽しくしてもらってありがとうございました。これからの長い長い人生がいつも幸せでありますよう心より祈っています。またいつでも来てくださいね。たんぽぽさんとすみれさんはまだまだ一緒に過ごせます。来年度も「覚悟」の保育に努めます。どうぞよろしくお願いいたします。

園長　　山内　香幸